

『内乱史』第1巻

序論

1 ローマの^{プレブス}平民^(一)と元老院は（昔には）しばしば立法、負債の帳消し、土地の分配、あるいは政務官の選挙をめぐる互いに対立していた。しかし内紛は暴力沙汰には至らなかった。意見の衝突はあったがそれも法の枠内での対立に留まっており、彼らは互いに譲歩することで収め、互いを大いに尊重し合っていた。かつて平民がある戦争に行くことになった時にこの手の争論が起こったものだが、彼らは手に持った武器を使わず、この時から聖山と呼ばれることになった丘に退いた^(二)。その時ですら暴力沙汰にはならなかったが、元老院によって選出されていたために平民がその政治権力から疎外されていた執政官をとりわけ掣肘するため、彼らは自分たちを保護する官職を創設してこれを護民官と呼んだ。こうなるといっそう大きな反目が起こり、この出来事の後には政務官たちは尚更強く相互を憎悪するようになり、各々は自分たちの政務官の権力を増すことで他者に打ち勝てる信じ、元老院と平民はそれぞれに味方するようになった。この種の争いの真っ只中でマルキウス・コリオラヌスは不正に追放されたため、ウォルスキ人のもとに避難して祖国に対して戦争を起こした⁽¹⁾。

2 これが昔の騒擾で唯一見つかる武力衝突の事例で、これは一人の亡命者によって起こされたものであった。これまで剣が議場へと持ち込まれた試しはなく、市民の虐殺も起こらなかったが、それもティベリウス・グラックスが護民官を務めて新法を制定するまでのことで、彼は内乱の最初の犠牲者となった。カピトリウムで彼と一緒に集まっていた他の多くの人

(一) ὁ δῆμος [ホ・デーモス]。ギリシア語ではこの語は自由市民全体に対して用いられている。ラテン語ではプレブス [plebs] という語は平民に、ポプルス [populus] という語は平民と貴族を合わせた全体に対して用いられている。プレブスとポプルスとの区別がテキストの正しい理解のために必要な場合を除いて「人々」[people] という訳語は凡そデーモスと同義に用いることとしたい。

(二) リウィウス, II. 33. 34。

(1) 前出のリウィウスの箇所続きによれば、このグナエウス・マルキウス・コリオラヌスの亡命の過程は以下のようなものである（リウィウス, II. 34. 35）。紀元前 494 年のいわゆる「聖山事件」の際に聖山に立てこもったおかげで平民たちは種蒔きができず、このために紀元前 492 年に穀物不足と食糧危機が生じた。これを受けて執政官たちは穀物を各地から買い付けてかき集めたが、この穀物をいくらで平民に供給するかという議題が元老院で議論された。この際、平民を目の敵にしていた貴族の一人コリオラヌスは、平民が聖山事件で獲得した権利を放棄しない限りは平民の要求する値段で供給すべきではないと訴えた。これは平民の怒りの炎に油を注いで護民官が彼を告発するに至り、貴族たちも彼をかばいきれなくなった。ついに彼は審判の日に敵対するウォルスキ人のもとに亡命し、被告人不在のまま有罪判決が言い渡された。

たちと一緒に彼は神殿のあたりで殺された。騒擾がこの惨死をもって終わることはなかった。党派は繰り返し公然たる衝突に突入し、しばしば短剣が持ち込まれた。ある時は神殿で、またある時は議場で、そしてまたある時は広場で、護民官、法務官、あるいは執政官、もしくは公職の候補者、その他卓越した人たちが殺された。相応しからぬ暴力が、法と正義に対する恥ずべき侮蔑と共にほとんど常態と化した。悪人が重きをなしたため、政府に対する公然たる反逆と国家に対する夥しい好戦的な軍事遠征が亡命者、罪人、あるいは公職や軍指揮権をめぐって互いに対立する人物によって企てられた。最高権力を望む諸党派の首領たちが様々な場所におり、彼らのある者たちは人々から委ねられていた軍隊を解散させるのを拒み、他の者たちは公式の権限もなしに自分の利害のために互いに対抗して兵を徴募した。彼らのいずれもまず都を手中に収め、他の者たちは名目上敵と戦争を行っていたが、正味のところ戦っていたのは自国とであった。彼らは外敵のように自国に襲いかかった。市民に対する情け容赦ない無差別虐殺が行われた。ある人々は公権剥奪を被り、他の人たちは追放されて財産を没収され、またある人たちは凄惨な拷問さえ受けた。

3 グラックスの死から約五〇年間、相応しからぬ行いがなされないことはなく、党派の首領の一人だったコルネリウス・スッラは一つの悪を別の悪で治療し、国家の無期限且つ絶対的な支配者となり仰せた。そういった公職は以前には独裁官と呼ばれており、この公職はこの上ない非常事態に対処するために六ヶ月を期限として設置されていたが、遙か以前に廃れていた。スッラは名目上当選してであるが、正味のところは強制と暴力で終身独裁官になった。にもかかわらず彼は権力に飽きるようになり、私を知る限りでは最高権力を持ちながらも自発的にこれを手放して、不満を持っていた人たちに管理運営の報告をする^と宣言するだけの度胸を持った最初の人物となった。こうして彼はかなりの期間に皆が見守る中を一市民として公共広場を闊歩して何ら難儀に遭うことなく帰宅していたわけであるが、通りすがりの人々の心中に未だ残る彼の政権への畏怖の念、彼が権力を手放したことへの驚きはこれほどに大きなものだった。ことによると彼らは報告のために彼を呼ぶのを恥じていたか、あるいは彼への他の好意を抱いていたか、もしくは彼の独裁が国家にとって有益だったと信じていたのかもしれない。したがってスッラが成した悪と引き換えにスッラの存命中は短期間ながら党派抗争が止んだ。

4 彼の死後に起こった新たな厄介事は、選挙によって数年間ガリア担当の指揮権を保持したガイウス・カエサルが、元老院から指揮権の返上を命じられるまで続いた。彼はそれが元老院の要望ではなく自らの敵対者でありイタリアで軍の指揮権を握っていたポンペイウスの要望だと難詰し、彼の打倒を企てた。かくして両者が軍を保有することで他方の敵意を恐れる必要がないようにするか、あるいはポンペイウスも軍を解散させてカエサル自身と同じように法の下で一市民として暮らすべきだと彼は提案した。両方の提案が拒まれると彼はガリアからローマ領にいるポンペイウス目がけて進軍し、イタリアに入って彼を逃亡に追い込み、テッサリアへと追撃して大会戦で彼に対する見事な勝利を得て、エジプトまで追跡した。エジプト人によってポンペイウスが殺されると、カエサルはエジプト情勢への対処に取り組み、この国の王朝を落ち着かせるまで同地に留まった。それから彼はローマへと帰還した。目覚ましい軍事的偉業のために「偉大なる者」とあだ名された正敵を戦争で打ちひ

しぐと、彼は今や偽りの仮面を脱ぎ捨てて支配するようになり、最早何事であれ彼に異議を唱えられる者はいなくなり、スッラに次いで終身独裁官に選出された。再び全ての紛争が終わったが、これも彼の権を妬んで父祖の政体を復活させようと望んだブルトゥスとカッシウスがこの最も人気があり政権運営の技術に最も熟練した男を元老院で殺すまでのことだった。人々は彼を大いに悼んだ。彼らは彼の殺害者を追討すべく市内を探し回った。彼らは彼を公共広場の真ん中に埋葬して火葬用の薪があった場所に神殿を建設し、彼を神として崇めて生け贄を捧げた。

5 今やこれまで以上の内乱が再び起こるに至り、これは激化していった。元老院議員といわゆる騎士の多くの人たちを含む両階級の虐殺、追放、公権停止がすぐさま起こり、主な党派は互いに敵対者を引き渡し、この目的のために友人と兄弟さえ容赦しなかった。このように敵対者への憎悪は近親の情を上回るほどだった。出来事が経過する中でローマ人の帝国はアントニウス、レピドゥス、そして当初はオクタウィウスと呼ばれていたが後に他方のカエサルとの血縁と彼の遺言で養子となったカエサルといった三人の男たちによってあたかも彼らの私有財産のように分割された。当然のことながら、この分割から間もなく彼らは互いに争うようになり、知性と巧妙さで上回っていたオクタウィウスはまずレピドゥスから彼の割り当て分のアフリカを奪い、その後アクティウムの海戦の結果としてアントニウスからシリアとアドリア湾の間の全ての属州を奪った。それから全世界がその権力の驚くべき威容への驚愕に満たされていた間、彼はエジプトへと航行してこの国を手中に収めたわけであるが、ここは最も古く、当時はアレクサンドロスの後継者たちの中で最も強大な領土で、今やできあがったローマ帝国完成のために欠けていた唯一の土地だった。これらの偉業の結果、すぐに彼は生きながらにして神の称号へと登り、ローマ人によってこのように認められた最初の人物となり、彼らからアウグストゥスと呼ばれた。彼はこの国と服属した諸民族にカエサルが持ったような権勢を振るったどころか、選出や委任という形式、あるいはそのそぶりさえ必要としないというカエサルさえ上回る権勢を持った。彼の政権は時の経過と熟練によって強化され、彼自身も全ての事柄で成功して皆から崇められたため、彼は自分の後に似たようにして最高権力を握る家系と相続者を残した。

6 したがって諸々の内乱からローマ人の国家は団結と君主制へと移行した。これらの事柄がどのように進展したのかという話を私は書き記し山と積み上げ、編集したわけであるが、これは人々の計り知れない野心、権力への恐るべき欲望、疲れを知らぬ忍耐、そして悪の無数の形を知りたいと望む者ならば実に学ぶ価値があるものである。とりわけ私にとってこれは私の『エジプト史』の予備作業となるものである。クレオパトラがアントニウスと軍を合体させてからエジプトはこの最後の動乱の末に奪取され、これらの事柄の終わりがエジプト史の始まりとなるものである以上、これらの事柄は予め述べる必要があることである。仕事の大きさを鑑みて私は作業を分割し、まずセンプロニウス・グラックスからコルネリウス・スッラの時代までに起こった出来事を取り上げ、次いでカエサルの死までの出来事を取り上げることにしたい。『内乱史』の残りの巻は三頭政治⁽²⁾が互いとローマ人に対して引き

(2) いわゆる第二次三頭政治を指す。

起こした出来事について、戦いの終結に至るまで扱ひ、オクタウィウス・カエサルがアントニウスとクレオパトラ兩人に対して戦ったアクティウムの海戦という最大の出来事がエジプト史の始まりを成すはずである。

第1章

ローマの公有地

7 イタリアの諸族を戦争で立て続けに平定するとローマ人は彼らの土地の一部を取り上げてそこに町々を建設し、あるいはすでに存在する町には植民地を作り、これらを守備隊の代わりに利用した。戦争で獲得した土地を彼らは移住者に耕作地として分配したり貸し出したり売ったりした。当時の彼らには戦争で荒廃していた土地（これは概して大部分の土地だった）を割り当てる暇がなかったため、当面は毎年の穀物の十分の一と果物の五十分の一を納付すれば〔希望者は〕そこで働いても良いという公布を行った。家畜の群れを保有している人は家畜、つまり雄牛と小牛の両方の納付が必要となった。最も勤勉な人々だと考えられているイタリア民族を増やすためにこれらのことを行っていたのならば、ローマ人は本国に豊富な同盟者を持てただろう。しかし全く逆のことが起こった。というのも金持ちは割り当てられていない土地の大部分を我が物とし、時効によってその土地を取り上げられなくなると信じるほど大胆になり、ある部分は購入によって、また他の部分は無理やりに貧しい隣人の僅かな農地を自分たちの保有地に加えたため、一か所だけの地所の代わりに広大な土地を耕作するに至り、自由民の労働者は農業から軍隊に連れて行かれるのでこの目的のために奴隷を労働者と牧者として使った。奴隷所有それ自体が奴隷の子供の多さのおかげで彼らに莫大な利益をもたらし、奴隷は軍役を免除されていたためにその数は増えた。したがって有力者は大金持ちになり、奴隷の集団が国中で増加していた一方、イタリア人たちは困窮、税金、そして軍役で圧迫されてその数と精力を減退させた。この諸悪からつかの間の解放が得られたとしても彼らは時を無駄に過ごす羽目になっていたのであるが、それは金持ちが土地を掌握して自由民の代わりに奴隷を耕作者として使っていたからだ。

リキニウス法

8 これらの理由から人々は十分なイタリア人同盟者が最早いなくなり、政府自体が膨大な数の奴隷によって危機に晒されるのではないかと悩むようになった。樹木、建物、〔農業用の〕設備を含めた彼ら〔大土地保有者〕が非常に長らく保持していた多くの財産を取り上げることは簡単なことでも明白に正当というわけでもなかったのでいかなる解決手段も見つからず、すぐにある法律が護民官の求めでやっとのことで通過したが、これは何人たりとも五〇〇ユゲラ以上はこの土地を保有してはならず^(三)、牛一〇〇頭あるいは羊五〇〇頭以上

(三) 「τῆσ δὲ τῆσ γῆσ」。「この土地」つまり公有地〔ager publicus〕は普通の土地ではない。ローマの諸々の農地法が一人の人間が保有できる不動産の量の制限を意図した